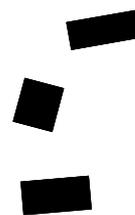


4

大谷心基（京都教会 / ホームレス支援特別委員会委員長）

出会った者勝ち



主イエス・キリストは勝利者です。教会は勝利者に出会い、勝利を味わいます。それは、人間のみのあらゆる思想と行為によって、がんじがらめになった世界に勝ち、その世界から解放されるという勝利です。教会もがんじがらめではないでしょうか。教会に漂っている雰囲気、ルールは、聖書の言葉が用いられながらも、主イエス抜きで、かちこちになってはいないでしょうか。

だから、世界中にはあらゆる歴史と状況を担う人々がいるのに、教会に集まることができる人は、そのごく一部になってはいないでしょうか。あらゆる病や困窮をかかえる人々がいるのに、教会には、行政やNPOによる福祉的・奉仕的な集まりよりも、狭い範囲の人々しか来ることができていないケースはないでしょうか。

大きな困窮を抱える人々は敏感です。自らのいのちや精神、生活に対する危険を察知するアンテナが強く張られていきます。そうしないと生きていられないからです。しかし、安定と安全を手に入れていると多くの人々には、その危険が見えません。なぜなら、その危険は、雰囲気のなかに見事にもぐりこんでいるからです。最近では、世界に意識されないそのような危険、しかし、健康的、経済的、社会的に弱い立場にいる人々は察知せざるをえない危険を、逆に見えない大多数による「文化的暴力」と呼びます。

そう、教会は、暴力をふるっている可能性があります。でも、がんじがらめでかちこちだから、その雰囲気と一体化している暴力に気がつかないかもしれません。でも、具体的に健康を害している者、精神の安定を獲得できない者、身体などに「障害」を持つ者や、在日外国人や、貧しい地域に住んでいる人々で、繰り返し大多数のそうでない市民から圧力、暴力を加えられている人、そしてホームレスを強いられている人々は、その集まりにある「文化的暴力」を察知します。だから、そういう集まりには行かなくなることでしょう。だから、もし、教会は、世間の福祉的・奉仕的集まりよりも、「文化的暴力」に敏感な人が少ないと言うならば、それは教会の大ピンチです。

と言うのは、主イエス・キリストは勝利者だからです。主は、「文化的暴力」にも勝利しているからです。その勝利を受けた教会は、上述等の大きな困窮を担う人々に歓迎され、そのような人々が、聖書を持って勝利者、解放者である主を讃美するだろうからです。だから、狭い範囲の人々しか教会にいないなら、その教会は、主の勝利を知らないという、逆の証しを地域にしているのかもしれない。

いかがですか。すべての教会のテーマではないでしょうか。さらに言うと、ホームレスを排除していることはありませんか。教会の前にホームレスがいるときに、「教会が危険だ」と思っていないですか。逆です。ホームレスが「この教会は危険だ」としたたかに察知しているのではないのでしょうか。

でも、主イエス・キリストは、そんながんじがらめでかちこちの教会とキリスト者とその信仰を、わざわざ壊しに来てください。それは、教会の出会っていない、しかし世界にたくさんいる、まったく異なる大きな困窮を担う人々との

出会いを備えるかたちで来られることでしょう。その出会いから、教会、キリスト者は、身体、心、魂を実際に震わすほどに感動を与える信仰の「中身」を知ることでしょう。その「中身」は、教会の「抽象的な言葉」や、実は、ただ教会運営や人生の「方法論」でしかないことが多いところの教会の貧しい信仰を、ひっくり返してくれるに違いありません。

そして、そのような出会いこそ、がんじがらめの世界に対する勝利ではないでしょうか。

そして実は、出会いを経験しないとき、それは主イエス・キリストとも出会っているのではなく、ただ、主のことを抽象化し、ハウ・トゥー化するかたちで、機械的な道具にしているだけかもしれません。

出会いが勝利。出会った者勝ち。

連盟ホームレス支援特別委員会は、連盟に加盟するみなさまの祈りに支えられ、有意義な仕事を担うことができます。心から感謝するばかりです。それらは、シンポジウムの記録集および、バプテスト教会が中心となっている各地域でのホームレス支援関係の報告書などから知ることができます。

そこには、深い祈りと聖書との対話から頂いた言葉が並んでいると思います。年々言葉が深化していると思います。今年も9月にシンポジウムがあります（当レターの案内を御覧下さい）。もっと、対話が深まり言葉が深くなるはずです。みなさまの参加を心からお待ちしています。

共に聖書を頂きましょう。共に主と出会い、世界と出会い、隣人と出会い、ホームレスと会いましょう。出会いは神様からのプレゼント。そうやって、主を中心に共に生きていきましょう。そして共に本物の宣教をしましょう。

今後とも、当委員会のためにお祈りいただけますならば幸いです。わたしたちも、全国の教会・伝道所のために祈り、責任をもって、言葉を深めさせていきたいと願っています。主において

命との出会い

みなさん、こんにちは！私は、神奈川県平塚に住んでいます梶井です。平塚市は、湘南地区の西にある人口約25万人の地方都市です。比較的温暖なところのせいか、ホームレスの人々が増えています。ある人は150人、ある人は200人ぐらいいるんじゃないか。とっています。どういうところにおられるかという海岸線の防風林にブルーシートを張って住んでいる人が約50人とされています。駅や公園などにおられる方も約50人でしょうか。茅ヶ崎市との境となっている相模川河川敷にもおられるようです。

私が奉仕している教会は、比較的立地条件がよく、平塚市から伊勢原市へつながる大きな道路に面しています。月に1, 2回はホームレスの方が「食べ物や服などありませんか？」と訪ねて来るのです。最初は、ていよく、接しておりました。教会の牧師の仕事だけで精一杯ですので、自分から積極的に関わる姿勢はありませんでした。しかし、ある時から聖書の言葉 - 「この国から貧しい者がいなくなることはない

であろう。それゆえ、わたしはあなたに命じる。この国に住む同胞のうち、生活に苦しむ貧しい者に手を大きく開きなさい。」（申命記15章10, 11節） - という言葉が脳裏から離れることがなくなりました。自分も牧師のはしくれ、人様に聖書のことばを神の言葉として説教しているのに、この聖書のことばに従っていない。論語読みの論語しらず、という言葉があるようですが、自分は聖書読みの聖書知らず、じゃないか？という内なる声が自分をグサッと刺すようになりました。

そんな時、新聞で平塚市の隣の茅ヶ崎市で増え続けるホームレスの人たちの支援施設「ポルト湘南」が出来たという記事を読んだのです。早速、「ポルト湘南」へ電話しました。すぐ、ポルト湘南の責任者の方がわざわざ来てくださいました。責任者の方によると平塚には、今、「平塚パトロール」というボランティアグループがある、ということでした。「平塚パトロール」のリーダーの方に依頼して、メンバーに入れさせて頂きました。

「平塚パトロール」というホームレス支援グループは、横浜・寿町のホームレス支援ボランティアの方が中心のグループです。活動を紹介しますと、月2回のパトロール、月1回の平塚市福祉課との協議会。半年に1回程度のバーベキュー会です。会場は平塚教会の中庭です。教会員の方も参加してくださり、一緒に食事を共にしています。

夜間のパトロール、行政との協議会出席、生活保護申請の付き添い、悩みごとの相談、ギャンブル中毒から立ち直るための支援など、なぜ、し続けているのか、抜けることができなくなったじゃないか、という内なる声が時々、聞こえてきます。キリスト教会の信者さんも一枚岩ではありません。「そこまで牧師は、関わる必要はないのでは」「ホームレスの人を教会に迎え入れると臭い」という声が聞こえてきます。

では、なぜ、徒勞に思える関わりを続けるのか。

それは、やはり、キリストの弟子の一人でありたい、と思っているからです。キリストは、飢えている者、旅をしている者、裸の者、病人、投獄されている者、すなわち、最も貧しく低くされている人々にしたのは、わたしにしてくれたことなのである、とおっしゃり、貧しい人たちと連帯されているわけです（マタイによる福音書25章34～40節）。ですから、わたしは、ホームレスの人たちや最も貧しく低くされている人々の背景に、イエス・キリストがいる、神がいると思っているわけです。

あるカトリックの神父さんは、天国と地獄をこう言っています。「この世界はごちそうが並んだ大テーブルのようだ。食べるには一つの厳密に定められた規則を守らなければならない。つまり1メートル半の長いフォークを使って食べるべし、という規則だ。地獄ではめいめい自分で食べようとして食べれないので、空腹で死にそうになり、隣の人をフォークで突き刺す。天国でも同じ規則だが、互いに与えあって、みな食べ、善意と愛にあふれて、喜びを味わう。」

実際、地球全体では食べ物は余っていますが、一部の国では食べ物がなく、体力のない子供やお年寄りが餓死しているのだそうです。私たちが、「この国に住む」貧しく低くされている方々と共に生きていく、互いに与え合う生き方自体が、この国と世界の貧しく低くされている方々と共に天国へのエスカレーターに乗っていることになるのでしょうか。

「福岡おにぎりの会」活動報告

「福岡おにぎりの会」は1996年から活動を開始し、昨年（2004年）6月に、NPO法人となりました。活動事業内容は、以下のとおりです。

基礎的支援事業

夜回りパトロールを兼ねた炊き出しと、年3回の季節イベント（花見大会、夏祭り、雑煮大会）を行なっています。野宿者と出会い、彼らの置かれている現状や問題点を見つけるといふ、基礎的な活動です。

4月～11月は毎月第1金曜日の夜、12月～3月第2週は毎週金曜日の夜に行なっています（2月～3月2週は「熱いスープの会」と合同）。

炊き出しの総数は年々増えてきて、2004年度の越冬時期は550～600食の炊き出しを行ないました。

相談支援事業

問題を抱える人たちの相談を受け、解決のために共に考え共に行動していく事業です。自立支援の入り口であり、また居宅設定後も生活相談することによって、再び野宿生活へ戻ることの防止にもなります。

2004年度は、生活保護受給、年金請求、債務整理など、66件の相談がありました。

人権保護事業

野宿者の人権侵害に対する権利回復への取り組みです。今年度は、被逮捕者の支援（接見、差し入れ、裁判傍聴）、行政への申し入れを行ないました。

入院支援事業

入院している人たちに生活必需品の差し入れを行なったり、定期的に訪問して相談を受けたりします。毎月第2金曜日、第4木曜日に病院訪問を実施しています。

自立支援事業

野宿生活を脱し、居宅生活を送ることを支援する事業です。アパート探し、生活保護の申請、アパート設定に必要な書類の準備等を当事者と一緒に行ないます。2004年度は、合計14名の居宅設定（生活保護受給者10名、帰宅者2名、アルコール依存のリハビリ施設入所1名、大家とのトラブル解決1名）を行ないました。

Mさんは、知人の保証人となって借金を返すために年金担保融資を受けたため、生活資金が枯渇し、市営住宅を追い出されました。その後入院しましたが、入院中に生活保護が出ることを病院もケースワーカーも教えてくれず、退院後再びホームレス状態になり、相談に来られ、居宅設定しました。

情報提供事業

野宿医者に有益な情報の提供を行なっています。また、各種講演・セミナー等の実施、講師派遣、研修等の受け入れによって、「ホームレス問題」への啓発を行なっています。

行政交渉及び行政との協働事業

行政に対し、野宿者の支援の改善に関する申し入れを行ない、また行政からの協力要請に協働する事業です。

平野夜回りの会

「平野夜回りの会」は、平野バプテスト教会に集う人々を中心に作られたホームレス支援組織です。阪神大震災後、神戸で行われていた夜回りに参加していたメンバーの中から、「平野教会のまわりにも野宿者が増えた。神戸での夜回りだけでなく、自分たちの教会のまわりに住む野宿者にも夜回りをすべきではないか」との声が出はじめ、1999年1月1日、近所の公園に住む野宿者に雑煮を持っていったのが始まりです。計300回を越えました。

活動としては毎週日曜日の午後8時に平野教会に集合し、そこからスタート。平野区で最も大きな平野公園を中心に平野区の北部をまわるコース、大和川沿いを中心とした平野区南部をまわるコースで行っています。時々パトロールを目的としたコースを設定します。準備・夜回りは平野教会の教会員が中心になって行っています。夜回りの内容はおにぎり・味噌汁の配布、野宿者の健康状態・安否の確認、その他必要なもの（蚊取り線香・布・ろうそく・カイロなど）を渡すといったことです。

現在の状況は コース コースあわせて、出会う野宿者は12～13名。毎年冬には出会う人数も減り、夏になるとまた増えるといった感じです。一時期は25名を超えたこともありましたが、この冬は不在者も多く6名ほどのこともしばしばでした。平野区のほぼ全域を回っています。

野宿者の半数は自分たちの作った小屋に住み、残りは屋根があって雨露がしのげるところ（高架道や橋の下・建物の軒下など）に住んでいます。ほとんどの人は仕事がなく、空き缶や銅線を拾ってお金にかえています。会の活動としては、2004年から西成区で野宿者が生活保護にかかる手伝いをしている団体の方が参加して下さるようになり、平野から入院や居宅保護にかけられる野宿者の数が増えました。大阪府は長居公園の仮設住宅解体の際に、入居者を生活保護に多くかけたのが始まりで、生活保護申請が通りやすくなりました。そのため平野夜回りの会からも2004年度だけで6人の野宿者を病院に入院させることができ、4人の野宿者を居宅保護申請をしてアパートに入居する手続きができました。しかし、入院中の野宿者との連絡やアパートに移ってからのフォローが不十分であり、これから考えていかなければならないことだと思います。

この活動は教会の活動として行っていることにひとつの意味があると思っています。平野教会のそれぞれが野宿者について考え、特に教会の若者が夜回りに参加し、野宿者に育ててもらえたと思います。この活動は現在出会う人数が減ってきて、これからこういった形で行っていくか模索している状態ですが、続けていきたいと思っています。

<(_ _)>大変長らくお待たせいたしました！<(_ _)>

長いトンネルを抜け、2003シンポジウム報告書がようやく発行されました！ホームレス支援をしている方はもちろん、これからはじめたいな、と思っておられる方、ホームレス支援活動に興味のある方、ご一読をお勧めいたします。教会・伝道所には一冊ずつお送りしますが、マーカーで線を引いたりドッグイヤーをつけたり、涙や鼻水を落としたりできませんので、ぜひご自分用にお持ちになることをお勧めいたします。詳しくはニュースレター9頁をごらんください。

信仰告白

まず始めに、今までの私の人生を顧みますと、なんと好き放題、やりたい放題だったことかと思わざるを得ません。金は、使うし、家のものはもって出て売るし、お袋に小遣いもらうし、サラ金は借りまくるし、使いたい放題でした。

まだ、親父お袋ともに元気で風呂屋をやっていたころは、良かったのですが、風呂屋をやめてからは、金に困ると今度は、弟に金の無心をするようになりました。最初のうちは、弟も金を出してくれていましたが、仕舞いにはとりあってくれなくなり、電話をかけても、私の声を聞いたら電話もとらなくなりました。

その私が覚えておりますお袋の笑顔は、私が魚屋をはじめた時でした。「これで親父においしい魚を食べさせられる」と言ってニッコリ笑ったあの顔です。毎日毎日お客さんのところに行く前に家に寄りますと、親父がお袋に手を引かれて車のところまで出てくるのです。親父は、視力障害者でした。目は見えませんが、それでもお袋と二人で好きな魚を選んで行きます。「親父、魚代」というと、「親子やないか」と言って金をくれたことは一度もありませんでした。

そのうちにお袋の具合が悪くなり入院しました。入院から二、三ヶ月ぐらいたったころ意識不明になり大分医大に送られ十日間苦しみを抜いて死にました。

そして、私の日本全国放浪がはじまりました。

東京に行ったり、大阪に行ったりウロウロしました。あげく3年前1999年の12月30日に小倉に来ました。その日から駅のアミュ側通路に段ボールを敷き、寝ようになりました。最初のうちは、毛布もなく、寒くて、丸くなって寝ました。

そして、二ヶ月ぐらいがたちいよいよどうしようもなくなり、死のうと思ひ紫川に行き市役所側のベンチに横になっていました。そこに外国人の女の人が私の所に近寄ってこられ、私に手を置いて「いのちを大切に」と言われました。後で解ったのですがその人が、マッキントッシュ牧師の奥さんだったのです。私は、この一言で救われたのです。

その時ボランティアの炊き出しがあることを教えてもらいました。それからボランティアの度に弁当をもらいに行くようになりました。

2000年7月14日脳内出血を起こし入院しました。4ヶ月ほどの入院生活が続き、その後退院しましたが体の調子が思うようにならなくなり、2001年の7月23日に今後は眼底出血で入院となりました。そして、今年の2月9日に退院しました。退院後仕事に就く事が出来ましたが、7月になるとまた倒れるのではないかと心配でなりませんでした。それでもなんとか仕事をやりながら暑い時期も過ぎ今はひと安心です。この入院中に私は、東八幡キリスト教会に出会ったのです。

今私がこうやって家を借り、仕事がやれるのも、NPOひいては奥田牧師、そして東八幡キリスト教会のおかげです。

私の教会との出会いは、ボランティアの度に話していた人が、今思えば奥田牧師だったのです。最初の2、3回ぐらいは、ひやかしに行ってみようという軽い気持ちで教会に行ったのです。しかし、次第にはまっていったのです。今では、日曜日が待ちどろしくなるほど、私の心のよりどころになりました。

日曜日の度に教会にいくと「よくいらっしゃいました」と笑顔で迎えてくれます。少しお話をして席に案内されます。礼拝で奥田先生のお説教を聞きます。お茶を飲みます。時には食事もよばれました。帰る時は、「またお越してください」と送られます。ホームレスをしていた時は、食べるものも心配でしたが、人と話すことがほとんどないことがしんどかったのです。教会が私と関わってくださったことを感謝しています。今は、教会と出会えて本当によかったと思っております。今度バプテスマを受けるにあたり神の家族とならしていただきたいと思っております。ホームレス時代の経験を生かして人にやさしく何でも話し合えるような教会員になりたいです。

思い返すと紫川で死のうとした日。あの日はとても寒い日でした。ベンチで寝ている私に手を添え、声をかけてくれたあの手のぬくもり。それは、私にとっては、死んだお袋の手のぬくもりとも思えました。いや、今考えるとそれは「神の手」であったのでしょうか。あの時、あの方と出会わなければ、私は紫川に飛び込んで自分のいのちを断っていたことでしょうか。あの一言が無ければ、今の私はいないと思っております。出会いは、大切だと思っております。

私は、飛び込まずに済みました。しかしそれは、あの日イエス様が私の代わりに紫川に飛び込んで死んでくれたからだと思っております。イエスは、私の十字架を負われたのです。おかげで私が生きられたのだと今は思っております。

これからの私は、マッキントッシュ先生を通してイエス様からいただいた第二の「いのち」を大切に、かつての私のように悩み苦しんでいる人たちの役に立つような人生を送りたいと思っております。私を救ってくれた「いのちを大切に」という言葉を一人でも多くの人たちに伝えようと思っております。それが私にとって、キリスト者としての務めであると思っております。今日たった一つ心残りがあるとすれば、もう一度エリザベス・マッキントッシュ先生にお会いしお礼が言いたいということです。

今回バプテスマを受ける決心をした時、お袋が夢の中でニコニコ笑いながら「よかった、よかった」と言ってくれました。

今日、この教会で信仰告白をしている俺を見守ってくれていると思うお袋に言いたいことがあります。「お袋、もう天国にいて俺のことを心配するな。こんな俺でも教会員の皆さんやNPOの仲間に支えられて生きていけるのです。これからは、この俺が誰かの支えになれるような生き方をしたいと思っております。だから、もう心配しないでくれ。そして、天国で今まで忙しかった分、ゆっくりしてくれ。親父と一緒に好きな酒でも飲んでくれ」。

できれば、もう一度お袋を二人きりで行ったあの温泉に連れて行ってやりたい気持ちで一杯です。いつか天国で会えると信じています。

教会員のみなさま、こんな私ですがこれからよろしく願います。そして、最後にみなさま、教会員の方々みなさんと関わることが本当にうれしいです。私に出来ることがあれば、なんでも言ってください。よろしく願います。

2002年10月6日
北野孝友

「低み」へ、というバプテスマの課題

日本バプテスト連盟ホームレス支援特別委員会

『ホームレス支援に関するシンポジウム報告書』（2003年9月）を読んだ感想

—昨年、日本バプテスト連盟ホームレス支援特別委員会は、2001年11月（福岡）と2002年10月（浦和）の二回にわたって行われたシンポジウムの報告を冊子にまとめた。参加者の熱意と真剣さが伝わってくる、深い内容のものである。そこでは繰り返し、私たちの「つまずき」が語られている。第一回シンポジウムの開会礼拝説教で、松藤一作牧師は「希望を失い、生きることをあきらめ、自暴自棄になった人を支援することが、私たちにとって最大の難関である」と述べている。課題は明白である。しかし、そこには、私たちの力で成し遂げるにはあまりに困難な「大きな壁」がある。各報告は、ホームレス支援者がみな、この壁で必ず一度はつまずいていることを率直に語っている。阪神淡路大震災の経験からホームレス支援へと進まれた加藤誠牧師は、真夜中に尋ねてきた人を前にしたとき、自分のなかに「なんで来たんだ！」というつぶやきがあったと言われた。委員長の副田一郎牧師は、ホームレスの女性からもてなされた賞味期限切れのパンを前にして「躊躇がありました」とおっしゃる。最終日の朝礼拝説教で、中嶋名津子姉は、「渡すときになかなか引き気味で」、「人と同じ目線で話ができない」と述べられた。いずれも、単なる謙遜ではないだろう。報告書は、私たちが、「現場」で関わろうとして、躊躇と抵抗を感じてとまどう気持ちを真摯に語っている。

奥田知志牧師は、「抜き差しならない場所」としての現場ということを強調された。そして、「神不在と思われる場所」としての現場こそ「キリスト現臨の場」、「キリストが在なければならぬ場所」だ、という思いと、「教会の中に『現場』をもちこむことにどこか抵抗を覚えてしまう」という体制的な保守性との葛藤に言及されている。第二回シンポジウムの質疑応答では、教会で、「教会を訪ねてくるホームレスの方々と目を合わせられない」人たちがいて、「そこに神はどう関わって下さるのでしょうか」という問いが寄せられている。

おそらくこの「つまずき」が、私たちが立ち返る転換点なのだろう。躊躇や抵抗感、ホームレスに対する私たちの関わりが「上から」の視点になっていることを知らしめる。私たちは、底辺で困窮する者に関わろうとしながら、一方では、犯されたくない安泰な高みにとどまろうとして、安泰感が破られ「現場」がもちこまれることに躊躇し、抵抗感を覚えるのだ。教会のホームレス支援の課題は、みずからの躊躇に気づき、そこでつまずいて、高みからの関わりを放棄し、身を低く沈め、抜き差しならない現場へ、最も低いところへと身を置いていくということのうちにある。そしてこれは、バプテストの課題そのものなのだ。奥田牧師は本田哲郎神父の「バプテスマ」理解を引きながら、バプテスマとは汚れを洗い清めることではなく、「身を沈める、全身を低くみに置く」ことであると指摘する。「教会だからこそできる支援」は、躊躇いつまずきながらこのバプテスマの原点に立ち返り、低みに身を置こうとするところからしか見出されないだろう。本田神父は第二回シンポジウムで「良い子症候群」という表現をされ、そのような自分を繰り返し問い直す中で、釜ヶ崎で活動され聖書を読み返し訳し直してきたという。加藤牧師は、思わず発したあのつぶやきのあと、「彼らを受け入れていくことによって、私自身が、特に私の祈りが変えられていく」という経験を経て、「自分の立っている地面を掘り下げることがさせてもらってきた」と語る。高みから身を沈めていくこと、私自身が変えられ、私の祈りが変えられていくこと、神不在としか思われぬ最も低い低みへと下りることが、「教会だからこそできる支援」の原点である。そして、この低みこそ十字架の主が臨在する現場であるという証しが、シンポジウムの各報告を貫いている。

第二回シンポジウム報告は、第一回の会合で浮き彫りになった「低み」への転換点から支援活動を問い直す内容となっているのが興味深い。高市和久牧師の開会礼拝説教から始まって、「共に」ということが繰り返し語られ、内面の深まりと社会的な関わりが議論されていく。低みにあって「私たちが『共に』うめいている」ところから、何が生

まれるのか。ホームレスの方々から生きるたくましさを学んだなどと口にする私たちに、「路上生活者の心の奥を見せたい」と、ご自身もホームレスであった成田錦治さんは叫ばれている。「闇の中で、もがき苦しんでいる姿を、人の目を避け公園のベンチで下を向いて座っている姿を、人と会うことを避けながら生きていく姿を」見せたい、見えるか、と。低みで私たちはキリストと出会い、隣人と交わり、希望を知り、喜びを知って満足するというのではない。やっと低みに下りたとき、私たちは絶望を知り、神不在を目の当たりにし、本田神父の言われる「一番貧しく小さくされた者」の苦しみと悲しみを知る。しかもそこで出会う人たちは、私たちがまだこの闇の深さを内側からは知らないと呼び、それが見えるかとおっしゃる。低みに下りたと思っている私たちが、この方たちをそこから高みに引っ張りあげようと支援しているなら、そんな努力は、この叫びの中でばらばらに解体されてしまう。

教会は、この闇と困窮に身を沈めるという課題と、それができるのか、どこまでも内側から「共に」寄り添うことができるのかという私たちに突きつけられた問いのはざま、何をなすのか。このシンポジウムが残した問いである。連盟宣教研究所の吉高叶牧師の講演と質疑応答では、こうした闇を産み出す現代社会の「社会的経済的構造」が問われ、ホームレスを排除・攻撃する社会の「ゆがみ」が考察されている。私たちは福音的な課題と社会的な課題とを区切ってしまいがちだが、シンポジウムの議論はこの二つの課題をひとつの視座のもとにまとめていこうとするなかで、さらに問いを重ねる。「最も小さくされた者」の闇に身を沈めることができるのか、そして、そこから現代社会を見つめ、行動することができるのか。報告書の読後感、課題が整理され、成果が評価されてスッキリしました、よく眠れそうですといったものではない。シンポジウムの議論を通して、私たちの祈りはますます苦しくなり、突きつけられた問いはますます厳しくなってしまう。しかし、報告書を読み返すたびに、私たちのしぐさやまなざし、私たちの身を置く姿勢は、目の前の人と「共に」あるなかでより小さくより低く、と促され、私たちの行動と発言は、この人と私たちを取り巻く現実の社会に向けてより強くより広く、と励まされるのを感じる。闇のなかで困窮する者がかたわらにいるのに、高みで安らかに眠ってはならない、来なさい、と私たちは繰り返し呼びかけられているように思われる。

「ホームレス支援に関するシンポジウム報告書」

(一冊500円のカンパをお願いしています)

2001年～2002年(2003年9月発行)

在庫僅少。連盟事務所にお問合せください。

教会・伝道所に一冊ずつ寄贈しています。

2003年報告(2005年6月発行)

連盟事務所、またはお近くのホームレス支援教会

(ニュースレター12頁)にお問合せください。

フィールドワーク報告

2005年1月10日から12日、北九州にて行われたフィールドワークは、私たちにとって、もう一度原点に帰る旅だったと思います。どこから、何をみつめ、誰と共に生きるのか。日々の活動の現実の「忙しさ」の中で、つい、押し流されてしまいそうな「原点」をみつめ直す旅でした。

1日目の開会礼拝では野口哲哉氏(岐阜教会牧師)がメッセージを語って下さいました。私たちが、あえて福音を語らずとも、神さまの業はそれよりももっと大きく豊かに働かれることを知らされました。各地の報告ではそれぞれの喜びと課題が分かち合われました。少しずつ国を含めた行政の目がホームレス自立支援に向けてきてはいるものの、まだまだ厳しい現実が続いています。けれども、その中で、行政ともパートナーシップを結びつつ、私たちが目指す「関係性の回復」のために働いていくのだと改めて感じました。その後、北九州市小倉北区にある「自立支援センター」を見学しました。NPO法人北九州ホームレス支援機構(バプテスト連盟やその他の諸教会が様々な形で関わりを持っています)が、その業務の多くを委託されているセンターです。個室であること、一人ひとりに対する関わり、事務所の雰囲気など様々なことが丁寧に考えられて作られているという印象を受けました。それぞれの思いを言葉にしつつ、1日目を終えました。

2日目は、野中宏樹氏(鳥栖教会牧師)による聖書研究から始まりました。野中氏が前任地で、阪神淡路大震災に合われた方々の支援に関わられながら、平野教会の事柄としてホームレスの方に出会っていかれたこと、その中で出会った方から語られるひとつひとつの言葉の中で揺り動かされていったことなどを通して、聖書を解きほぐして下さいました。起きてくる事柄の前に右往左往し、語られる言葉の重さに時として答える言葉を失う私ですが、それでもなお、そこから率直に聖書に立ち戻る姿勢を教えられました。お昼からは、梅崎浩二氏(教団犀川教会牧師)に、筑豊フィールドワークを案内していただきました。目に見え人々が気付く石碑には力を持つ側の「一方的な歴史」が刻まれ、その言葉は何もしなくても残っていくけれど、それに隠された真実は言い伝え聞き伝えていくしかないこと。強制連行されて炭鉱で労働させられた亡くなった韓国・朝鮮の方々の小さな小さなお墓。その後、犬養光博氏(教団福吉伝道所牧師)に、70年代の筑豊とそこに生きる子どもたちの様子をスライドで見せていただきながら、その頃から今までの筑豊の歴史、その痛みや喜びや悲しみの出来事を語っていただきました。これらの事柄もまた、聞き伝えられ、語り伝えていかなければ、失われてしまう事柄なのだ改めて知らされました。

ホームレスの方々が路上で亡くなっていきます。私たちはその方を哀しみと後悔と言葉にならない様々な感情でいっぱいになりながら送ります。そしてこの方が地上に確かに生き、今、亡くなっていったのだということを深く憶えてたいと願っています。そのことは確かに今回歩いた「筑豊の歴史を憶えること」とつながり、いのちを「数えるもの」としてではなく「一人ひとりの歴史」として憶えるという原点は共通にあるのだと感じました。

3日目はこの特別委員会のこれからの共通の課題を認識し、谷本仰氏(南小倉教会牧師)から3日間の事柄、これからの展望、私たちは確かに神さまの事柄に参与しているのだということが語られ、閉じました。

様々な問いかけと新たな決心と励ましを頂いた豊かな3日間でした。

ホームレス支援特別委員会シンポジウムのご案内

下記の通り2005年シンポジウムを開催いたします。参加希望の方は、別紙申し込み書にて、連盟事務所ホームレス支援特別委員会宛てお申し込みください。

テーマ：ホーム(関係性)の中身を考えよう

講師：孫裕久(そんゆんく)氏(教団川崎戸手教会牧師・日本聖書神学校講師)

日程：2005年9月26日(月)15:00~28日(水)12:00 <講演、映画会の部分参加歓迎>

会場：9月26日 大井バプテスト教会(東京都品川区大井5-10-12) <講演>

9月27日~28日 連盟事務所(さいたま市南区南浦和1-2-4) <映画「あしがらさん」>

会費：全日程参加(食事代別)5000円(少年少女以下特別料金500円)

26日夜講演会のみ参加 2000円(少年少女以下特別料金200円)

27日夜映画会のみ参加 1000円(少年少女以下特別料金100円)

*プログラムは右ページをご覧ください。

筑豊の炭鉱跡を見学して ～フィールドワーク参加の感想～

田川の炭鉱記念館は休館でした。展示品を見られなかったことは残念でしたが、建物の外観とその周辺が広々と美しく整備されているのを眺めながら、企業が勝ち誇るかのようにならぬ様を見た気がしました。

石炭を掘り出すのに、牛馬のようにこき使われ、低賃金で粗末な家で、家族共々貧困にあえぎ、苦渋の生活を強いられて来た人々のことを、私は早くから知っていました。父が書き残した「思い出の記」に炭鉱に関することが沢山書かれてありました。

病気で医者に見離され、上級学校進学もできず悶々としていた父は、自殺を思いました。丁度その頃、頻々と起きる炭鉱事故の報道を新聞紙上に見て、炭鉱へ行けば自殺同様の結果が得られると考え、自ら志望して炭鉱に入ったのでした。率先して坑道の最先に入っては度々大事故に合いながら、その度に九死に一生を得るということで「死すべき時がこなければ人は死するものにあらず」との人生観で生きる人となりました。そして目にしたこの世の生き地獄、人間とも思われず正視することのできない数々のことに出会ったのです。「そこにある警察署の巡査は、脱走者を捕捉するには役立つが、人権を擁護するなど及びもつかぬことだ」と悲憤やるかたない思いや、会社の厚い壁に立ち向かい、情熱を燃やしていた若い頃の父の姿を思い描きながら。。。今は静かに建ちつくすいくつもの記念碑、わずかに印をとどめる墓石、苦役の匂いがただよってくるような旧坑道や種々の器具などを見て廻りました。人が人として扱われないまま多くの人が無惨に死なれたことを思うに、重苦しいものに胸をしめつけられながらの見学でした。

梅崎浩二先生、犬養光博先生は「田川、筑豊で見たこと、語られたことを、一人でも多くの人々に告げ知らせしてほしい」と叫んでおられました。いつ、どこから、どのようにして炭鉱労働者として連行されて来たのか。皆々そそのかさされ、だまされて坑夫となり、奴隷のごとくに使役された。一方では金欲の亡者となって搾取することしか考えずに大企業に成り上がり、権威をかざして思うままのことをした人達がいた。こんなことがまかり通る世であってはならないと誰もが思います。しかし、わが国では今だにこの企業構造が底流にあり、それが今日のホームレスを生み出す要因にもなっている。。。等等語り合いました。

正直に云って、今の私にはこの問題を人々の心に届くように訴え得る用語が出てきません。わかりません。単純に何か助けになることをしたいと思うのですが何程の力にもなりません。行方に光を見たいのです。

心に痛みを覚えながら、今ひとつ定まりないところに居る私です。

感想文としてはどこか焦点が違っているような気持ちですが、思いの程を記しました。ご容赦ください。

シンポジウムプログラム

【9月26日（月）】 会場：大井教会	【9月27日（火）】 会場：連盟事務所	【9月28日（水）】 会場：連盟事務所
15:00 開会礼拝 松藤一作 15:30 各地区報告 17:00 夕食 19:00 講演 孫 裕久 21:00 一日目終了 * 宿泊希望者は連盟事務所へ移動	10:00 発題 加藤英治 12:00 昼食 13:00 発題 大谷心基 15:00 を受けて全体討論 17:00 夕食 19:00 映画「あしがらさん」上映 講演 奥田知志 21:00 二日目終了	9:30 拡大委員会 11:30 閉会礼拝 谷本 仰 12:00 三日目終了 * 1日目と2、3日目の会場が異なりますのでご注意ください。

当委員会が把握しているホームレス支援を定期的に行っている地区と教会、支援者が所属している教会は以下の通りです。活動の問い合わせ教会のみ電話番号を記しました。当委員会が把握できていない情報、「ここでもやっているよ」「うちでもやっているの載せてほしい」という情報がありましたら、ぜひ、連盟事務所気付、ホームレス委員会あてご一報くだされば幸いです。

尚、ここに記していない教会・伝道所以外にも、献金や物資献品などを通して支援活動をささえてくださっている教会・伝道所が多くあります。皆様の関心とお祈りを感謝いたします。

<p>【高崎地区】 日本バプテスト連盟高崎キリスト教会 027-353-6228</p> <p>【市川地区】 日本バプテスト連盟市川八幡キリスト教会 047-332-5197 日本バプテスト連盟市川大野キリスト教会 栗ヶ沢バプテスト教会 日本バプテスト浦和キリスト教会</p> <p>【藤沢地区】 藤沢バプテスト教会 0466-23-1088</p> <p>【平塚地区】 平塚バプテスト教会 0463-33-2320</p> <p>【岐阜地区】 岐阜バプテスト教会 058-265-0881 愛知新生キリスト教会</p> <p>【京都地区】 日本バプテスト京都教会 075-231-1351</p> <p>【平野地区】 平野バプテスト教会 06-6708-5852 日本バプテスト連盟シオンの丘教会</p> <p>【兵庫地区】 日本バプテスト連盟浜甲子園教会 0798-41-5300 宝塚バプテスト教会 尼崎バプテスト教会</p>	<p>神戸国際バプテスト教会 神戸バプテスト教会 神戸西バプテスト教会 神戸伊川キリスト教会</p> <p>【香川地区】 日本バプテスト連盟恵キリスト教会 087-861-0523</p> <p>【北九州地区】 日本バプテスト連盟東八幡キリスト教会 093-651-6669 南小倉バプテスト教会 日本バプテストシオン山教会 若松バプテスト教会 日本バプテスト枝光キリスト教会 直方バプテストキリスト教会</p> <p>【福岡地区】 日本バプテスト福岡基督教会 092-741-6256 バプテスト東福岡教会 平尾バプテスト教会 長住バプテスト教会 粕屋バプテスト教会宇美伝道所 日本バプテスト春日原キリスト教会</p> <p>【久留米地区】 日本バプテスト連盟久留米荒木キリスト教会 0942-27-0116 日本バプテスト連盟久留米キリスト教会</p> <p>【沖縄地区】 日本バプテスト連盟那覇新都心キリスト伝道所 098-942-4775</p>
--	---

【編集後記】

私は私の教会の牧師の説教が好きだ。いや、好き、嫌いという言い方は当てはまらないかもしれない。それを聴くことによって「自分のことだけを考える楽な生活」は送れなくなるからだ。私がホームレス支援をしている市川ガンバの会にいったら、思っていたきっかけは牧師の説教だった。今も時に「私なんか役に立たない」という気持ちになるとき、時機を得て牧師の説教が私の背中を押す。直接的に「ホームレス支援をしなさい」という言い方ではないのに、背中を押されるのは何故だろうか。参考までに先週の週報の巻頭言の一部を紹介したい。

「キリスト信仰は、現在から未来を見るのではなく、救われるという将来から現在を見るのであり、神様が見ておられ、予め備えて下さっているそこで生きる課題を見出す。現在から暗中模索して将来を問い尋ねるのではなく将来から現在を見る。その将来は主の約束だ。それは運命と言う過去に縛られた思考から解放だけでなく、私達の生活を福音から来る信仰で受け止めていく重要な要件なのだ」。ああ、この説教を聴いて、今回もまた背中を押されてしまった。現在の私だけを見ていると、「私なんか」というつぶやきしか出てこないのであるが、主がもう行っておられる場所から自分を見ると、「私でも何か（なんか）できるかな」という思いが与えられる。み言葉は人（私）を変える。あなどれない。（中嶋名津子 / 浦和教会）